

犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版 シングル・ターゲット潜在連合テストの作成 ——一般大学生を対象としたパイロットスタディー——

今井田 貴裕
大浦 真一

<キーワード>

①犯罪行為 ②迷惑行為 ③非許容的態度 ④潜在連合テスト ⑤一般大学生

<論文要旨>

本研究では、犯罪行為や迷惑行為への非許容的態度が質問紙法調査では社会的望ましさの影響を受けやすい可能性を考慮し、紙筆版のシングル・ターゲット潜在連合テスト (ST-IAT) を試作した。予備調査では、22名の一般大学生から犯罪行為と迷惑行為、非許容的態度の刺激語を収集した。本調査では、113名の一般大学生を対象に、予備調査から作成された犯罪行為と迷惑行為の潜在的な非許容的態度を測定可能な紙筆版ST-IATと質問票調査を実施した。分析から、一般大学生は犯罪行為と迷惑行為に対して潜在的にも顕在的にも非許容的であることが示され、性差は確認されなかった。また、犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度と社会的望ましさの関係においては、潜在面と顕在面すべてが無相関であった。今後、紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATの信頼性や妥当性の検証が必要である。

Development of A pencil version of a single-target implicit association test on non-permissive attitudes towards criminal behaviors and disruptive behaviors: A Pilot study with general university students.

Takahiro IMAIDA
Shin-ichi OURA

<keyword>

①criminal behaviors ②disruptive behaviors ③non-permissive attitude
④implicit association test ⑤general university students

<Abstract>

In the study, a pencil version of the Single-Target Implicit Association Test (ST-IAT) was developed because non-permissive attitudes towards criminal and disruptive behaviors may be influenced by social desirability in a questionnaire survey. In the pilot survey, stimulus words for criminal and disruptive behaviors and non-permissive attitudes were collected from 22 general university students. In the main survey, 113 general university students were administered a pencil version of the ST-IAT which was developed from the pilot survey and questionnaires which could measure non-permissive attitudes towards criminal and disruptive behaviors. The results of the analysis showed that general university students were implicitly and explicitly intolerant of criminal and disruptive behaviors, and no gender differences were identified. In addition, the relationships between the non-permissive attitudes towards criminal and disruptive behaviors and social desirability were not significant both explicitly and implicitly. The reliability and validity of the pencil version of ST-IAT for criminal and disruptive behaviors needs to be verified in the future.

犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版 シングル・ターゲット潜在連合テストの作成 ——一般大学生を対象としたパイロットスタディー——

今井田 貴裕
大浦 真一

問題

犯罪行為とは法律に違反する行為のこと(間宮, 2023)である。犯罪を行った者には、刑務所や少年院といった矯正施設で再犯防止を意図した取り組みが行われている(e.g., 木村, 2020; 熊谷他, 2019; 山本・鈴木, 2019)。近年では、再犯を予測可能なCase Formulation in Probation/Parole (CFP)といったアセスメントツールも開発されているものの、保護観察中の人々を対象に膨大な資料からアセスメントを行うためか再犯の予測精度が十分でないこと(羽間・勝田, 2021)が報告されている。これは、矯正処遇などによる直接的な犯罪行為への態度の変化を十分に捉えきれないことが原因の一端である可能性がある。そのため、再犯防止の観点では、犯罪行為への非許容的な態度を直接的にアセスメントすることが望ましい。しかし、犯罪に対する態度の測定は社会的望ましさの影響を受けやすく(Sea et al., 2020)、矯正処遇の現場で行った際は出所に関連する内容とも関連するため、直接的に犯罪行為に対する態度を測定したとしても回答の歪みは避けられない。したがって、矯正処遇領域での犯罪行為への非許容的な態度を測定するためには、意識的な回答の歪みの影響を回避できる測度が不可欠である。

他方、社会的迷惑行為は、欲求充足を第一に考えて行動することにより、他者に不快な感情を生起させる行為のこと(吉田他, 2009)である。具体的な社会的迷惑行為として、電車に乗る際のマナー違反、ごみのポイ捨て、公共ルールの違反や逸脱などが挙げられる(e.g., 原田他, 2009)。社会的迷惑行為は、反社会性のないものとして犯罪行為とは区別される(斎藤, 1999)ものの、心理的なメカニズムの異同についての検討は不十分である。社会的迷惑行為は、共感性や自己意識特性、社会的スキルなどは関連しないこと(中村, 2012)や、親しい者に対する共感性の高さが社会的迷惑行為のしにくさと関連すること(岡本他, 2023)などが示されている。また、社会的迷惑行為の抑止に関する報告(油尾・吉田, 2013)もあるが、上述した研究はいずれも質問紙によって社会的迷惑行為に対する認知や経験頻度を測定している。そのため、犯罪行為と同様に、社会的迷惑行為も非許容的に回答しようとする可能性がある。よって、社会的迷惑行為への非許容的な態度を測定する場合も、犯罪行為と同様に、意識的な回答の歪みの影響を回避する必要がある。

ところで、近年、社会的望ましさなどの意識的な回答の歪みの影響を受け難い潜在的態度を測定する調査法として、潜在連合テスト(Implicit Association Test: IAT)が開発されている(Greenwald et al., 1998)。IATは、ターゲットの概念カテゴリー(例、自己・他者)と属性カテゴリー(例、肯定・否定)を設定し、それぞれのカテゴリーに関連する複数の刺激

語の分類を行うことにより、概念と属性の連合を測定する。実際に、シャイネス（相川・藤井, 2011）や同性愛（Banse et al., 2001）の IAT が開発されている。IAT には PC 版と紙筆版の 2 種の方法が存在するが、藤井・上淵（2010）はそれぞれの特徴について言及している。まず、PC を用いた IAT では、参加者 1 名につき 1 台の PC が必要になることから大規模集団での実施が難しい。それに対して、紙筆版 IAT は、IAT を紙と鉛筆を用いて行うものであり、大規模集団での同時実施が可能である。また、IAT には対となる概念カテゴリーを設定するのが通常であるが、概念カテゴリーを 1 つのみに設定して実施するシングル・ターゲット（Single Target: ST）IAT もある。通常の IAT では、指標である D 値を求めるための課題（一致課題・不一致課題）の他に、刺激語を概念カテゴリーと属性カテゴリーに分類する練習課題を実施する必要があるため、平均で 10 分程度の時間を要する。これに質問紙の回答などを実験に組み込んだ場合、参加者の時間的負担はさらに増大する。しかし、ST-IAT の場合、属性カテゴリーを分類する練習課題を実施するのみであるため、通常の IAT よりも試行回数が減り、実施時間は 5 分程度となる。以上から、紙筆版の ST-IAT は、大規模集団を対象に回答者への負担が少なく実施可能な潜在的測度であると言える。紙筆版の ST-IAT は、これまでに、色に対する嗜好（中村・野寺, 2017）や、催眠に対する態度（大浦他, 2018）を測定するものが開発されており、一定の信頼性と妥当性が検証されている。したがって、矯正処遇の現場において、犯罪行為や迷惑行為への非許容的態度を測定する潜在的測度の導入を見越した場合、紙筆版の ST-IAT のほうが適当であると考えられる。

そこで本研究では、一般大学生を対象に、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度を測定する紙筆版 ST-IAT を作成することを目的とした。

本研究の倫理的配慮

本研究は、実施に当たって第一著者の所属先の研究倫理審査委員会および教授会の承認を得た（2022-H5）。

予備調査

目的

犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版 ST-IAT を作成するにあたって、犯罪行為と迷惑行為の概念カテゴリーの刺激語を収集する必要がある。予備調査では、自由記述の質問票調査を実施して、犯罪行為と迷惑行為の刺激語を検討した。

方法

一般大学生 22 名を対象に、犯罪行為と迷惑行為の刺激語を収集するため、自由記述の質問票調査を行った。質問は、マナーやモラル、ルールなどに対する違反行為、嫌がらせ行為、迷惑行為などに関する質問を設定した。また、絶対に許されない行為、容認されない行為を自由記述で挙げるように求めることで一般的にイメージされやすい犯罪行為を抽出した。さらに、仕方がない行為や容認される行為を挙げるように求めることで一般的にイメージされ

やすい迷惑行為も抽出した。

結果

回答から、最も回答が多かった犯罪行為と迷惑行為をそれぞれ4つ選定した。なお、刺激語の選定にあたって、文字数に差が出ないように第二著者と協議し、犯罪行為に関しては「恐喝行為」と「窃盗行為」, 「暴力行為」, 「不法侵入」を、迷惑行為に関しては、「ポイ捨て」と「路上喫煙」, 「信号無視」, 「騒音行為」をそれぞれ設定した。なお、属性カテゴリーについては、「容認する—容認しない」を設定した。属性カテゴリーの刺激語について第二著者と協議し、「容認する」に関しては、「許可する」と「認める」, 「受容する」, 「してもよい」を、「容認しない」に関しては、「許可しない」と「認めない」, 「受容しない」, 「してはいけない」をそれぞれ設定した。各刺激語をTable 1に示した。

Table 1
予備調査で得られた紙筆版ST-IATの刺激語

| | 概念カテゴリー | | 属性カテゴリー | |
|-----|---------|------|---------|---------|
| | 犯罪行為 | 迷惑行為 | 容認する | 容認しない |
| 刺激語 | 恐喝行為 | ポイ捨て | 許可する | 許可しない |
| | 窃盗行為 | 路上喫煙 | 認める | 認めない |
| | 暴力行為 | 信号無視 | 受容する | 受容しない |
| | 不法侵入 | 騒音行為 | してもよい | してはいけない |

考察

予備調査から、犯罪行為と迷惑行為の概念カテゴリーに関する刺激語が抽出された。また、非許容的態度に関する属性カテゴリーとして「容認する—容認しない」に関する刺激語が抽出された。また、一致課題には連合が強いほうの課題を用いること (e.g., 土居・川西, 2012; 潮村, 2015) から、本研究では、「犯罪行為」・「迷惑行為」と「容認されない」の概念・属性カテゴリーのまとまりを一致課題とし、前者を紙筆版犯罪行為ST-IAT、後者を紙筆版迷惑行為ST-IATとした。

本調査

目的

予備調査より得られた犯罪行為と迷惑行為の概念カテゴリーに関する刺激語と非許容的態度の属性カテゴリーに関する刺激語を基に、犯罪行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATと迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATがそれぞれ作成された。さらに、これらの概念カテゴリーと属性カテゴリーの刺激語から生成した意味微分 (Semantic Differential: SD) 法により、犯罪行為と迷惑行為への顕在的な非許容的態度を測定する尺度も作成した。本調査では、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度の潜在的側面を紙筆版ST-IATで、顕在的側面をSD法による質問票で測定する。これにより、従来のIATの研究 (e.g.,

藤井他, 2015; 中谷他, 2021)と同様に、潜在面と顕在面の違いを明らかにすることで、犯罪行為や迷惑行為に対する潜在的な非許容的態度の測定の意義を検討することを本研究の第一の目的とした。

なお、これまで開発されてきたIATについては、社会的望ましさの影響を受け難いことが報告されている。例えば、シャイネスIAT (相川・藤井, 2011) や自尊心IAT (藤井, 上淵, 2010), 結核IAT (森他, 2020) により測定されたそれぞれの潜在面は、社会的望ましさと無相関であった。したがって、本研究で作成した犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATも、社会的望ましさと無相関であると考えられる。

方法

調査協力者

平均年齢19.73歳 ($SD = 1.77$) の一般大学生113名 (男性36名, 女性77名) の協力を得た。

紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IAT

まず、本研究の犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATは、いずれも練習課題1ブロックと実施課題4ブロックで構成された。

次に、冒頭のブロックは練習課題であり、制限時間は無制限とした。「容認する」を紙面の一方に、「容認しない」を紙面のもう一方に記載し、紙面中央に記載された刺激語を分類する課題であった。協力者には練習課題であることを伝え、分析には用いなかった。

2ブロック目と3ブロック目は不一致課題で構成された。制限時間について、前者が10秒と、後者が20秒とそれぞれ設定した。不一致課題では、「犯罪行為 (迷惑行為)」と「容認する」を紙面上部左側に、「容認しない」を右側にそれぞれ記載した。分類する刺激語を紙面中央に記載し、協力者には刺激語を一番上からできる限り速く分類するよう求めた。具体的には、刺激語が「犯罪行為 (迷惑行為)」あるいは「容認する」であった場合には刺激語の左側の空白に、「容認しない」であった場合には刺激語の右側の空白にチェックさせた。

4ブロック目と5ブロック目は一致課題で構成され、制限時間を前者が10秒と、後者が20秒とそれぞれ設定した。一致課題では、「容認する」を紙面上部左側に、「犯罪行為 (迷惑行為)」と「容認しない」を右側にそれぞれ記載した。分類する刺激語を紙面中央に記載し、協力者には刺激語を一番上からできる限り速く分類するよう求めた。具体的には、刺激語が「容認する」であった場合には刺激語の左側の空白に、「犯罪行為 (迷惑行為)」あるいは「容認しない」であった場合には刺激語の右側の空白にチェックさせた。

さらに、一致課題から実施する協力者と不一致課題から実施する協力者を約半数ずつランダムに振り分けることにより、カウンターバランスをとった。

以上の構成を犯罪行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IAT (Table 2) とし、犯罪行為を迷惑行為に入れ替えたものを迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IAT (Table 3) とした。

犯罪行為への非許容的態度の潜在面得点を、一致課題1と2の正答数の合計から不一致課題

Table 2
紙筆版犯罪行為ST-IATの構成

| ブロック | 課題 | 制限時間 (秒) |
|------|---------------------------|----------|
| 1 | 練習課題 「容認する—容認しない」 | 無制限 |
| 2 | 不一致課題 1 「犯罪行為・容認する—容認しない」 | 10 |
| 3 | 不一致課題 2 「犯罪行為・容認する—容認しない」 | 20 |
| 4 | 一致課題 1 「容認する—犯罪行為・容認しない」 | 10 |
| 5 | 一致課題 2 「容認する—犯罪行為・容認しない」 | 20 |

注) 協力者の約半数を一致課題から実施することによりカウンターバランスをとった

Table 3
紙筆版迷惑行為ST-IATの構成

| ブロック | 課題 | 制限時間 (秒) |
|------|---------------------------|----------|
| 1 | 練習課題「犯罪行為・容認する—容認しない」 | 無制限 |
| 2 | 不一致課題 1 「迷惑行為・容認する—容認しない」 | 10 |
| 3 | 不一致課題 2 「迷惑行為・容認する—容認しない」 | 20 |
| 4 | 一致課題 1 「容認する—迷惑行為・容認しない」 | 10 |
| 5 | 一致課題 2 「容認する—迷惑行為・容認しない」 | 20 |

注) 協力者の約半数を一致課題から実施することによりカウンターバランスをとった

1と2の正答数の合計を引くことによって算出した。迷惑行為への非許容的態度の潜在面得点も同様に算出した。なお、犯罪行為または迷惑行為に対して非許容であった場合、一致課題の正答数が不一致課題の正答数よりも多くなることにより値は正となる。一方で、犯罪行為または迷惑行為に対して許容である場合、一致課題の正答数が不一致課題の正答数よりも少なくなることにより値は負となる。0であった場合、態度は中立となる。

尺度構成

顕在的な犯罪行為と迷惑行為に対する非許容的態度を測定するために、予備調査で収集されたIATの概念カテゴリーの各刺激語について、全ての属性カテゴリーの刺激語を両端に配置したSD法による質問紙を作成した。犯罪行為と迷惑行為の尺度それぞれ16項目で構成され、合計32項目であった。同尺度は、得点が高くなるほど犯罪行為や迷惑行為に対して非許容的である傾向を示す。

社会的望ましさを測定するために、バランス型社会的望ましさ反応尺度 (Paulhus, 1991) 日本語版 (谷, 2008) で測定した。同尺度は、自己欺瞞 (項目例, 私は自分で決めたことを後悔しない) と印象操作 (項目例, 人を罵ったことがない) の各12項目で構成される7件法 (「1. 全くあてはまらない」～「7. 非常にあてはまる」) の尺度である。同尺度は、得点が高くなるほど社会的に望ましい反応をする傾向を示す。

実施手続き

犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATは、事前に協力依頼書を配

布し、同意の得られた一般大学生を対象とした。紙筆版ST-IATの実施前に筆記用具を机においてもらった状態で、紙面上に印刷された説明文を実験者が読んで説明を行った。その後、回答者に筆記用具を持つように求め、実験者の「はじめ」の合図で課題を開始し、「やめ」の合図で課題を停止した。犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度に関する紙筆版ST-IATを実施した後、質問票への回答を依頼した。なお、本研究は、一般大学生を対象としたこともあり、犯罪行為に対しては潜在面も非許容的であると考えられた。そのため、犯罪行為および迷惑行為に関する紙筆版ST-IATの手順のカウンターバランスはとらず、まず紙筆版犯罪行為ST-IATを実施し、その後に紙筆版迷惑行為ST-IATを実施した。

結果

基礎統計量と性差

各尺度の基礎統計量を算出した。紙筆版ST-IATに関しては、犯罪行為や迷惑行為への非許容的態度の平均値は同程度 ($M_s = 2.24, 2.56$) であったが、標準偏差は大きく異なっていた ($SD_s = 6.10, 11.17$)。しかし、これらの紙筆版ST-IAT同士の得点に対する t 検定の結果、有意差は確認されなかった ($t(112) = 0.33, p = .75, d = 0.04$)。他方、SD法による犯罪行為や迷惑行為への非許容的態度には天井効果が生じた。また、内的整合性については、いずれの尺度も許容範囲内 ($\alpha_s = .68 \sim .97$) であった。

次に、各尺度の性差の検討をするため、各尺度別に Welch の t 検定を実施した。犯罪行為に対する非許容的態度においては、潜在面 ($t(76.55) = -1.66, p = .10, d = -.32$) も顕在面 ($t(42.37) = -0.96, p = .34, d = -.25$) も有意な性差が見られなかった。したがって、以後の分析では、性別で分けずに分析した。

Table 4
各尺度の基礎統計量と性差の検討結果

| | 全体 ($N = 113$) | | | 男性 ($N = 36$) | | 女性 ($N = 77$) | | t | df | d | p |
|------------|------------------|-------|----------|-----------------|-------|-----------------|-------|-------|-------|------|-----|
| | M | SD | α | M | SD | M | SD | | | | |
| 潜在的な非許容的態度 | | | | | | | | | | | |
| 犯罪行為 | 2.56 | 11.17 | — | 0.14 | 10.18 | 3.69 | 11.48 | -1.66 | 76.55 | -.32 | .10 |
| 迷惑行為 | 2.24 | 6.10 | — | 1.67 | 6.51 | 2.51 | 5.92 | -0.66 | 63.00 | -.14 | .51 |
| 顕在的な非許容的態度 | | | | | | | | | | | |
| 犯罪行為 | 6.91 | 0.36 | .97 | 6.85 | 0.53 | 6.94 | 0.25 | -0.96 | 42.37 | -.25 | .34 |
| 迷惑行為 | 6.44 | 0.80 | .95 | 6.38 | 1.09 | 6.47 | 0.62 | -0.50 | 45.96 | -.12 | .62 |
| 社会的望ましさ | | | | | | | | | | | |
| 尺度得点 | 3.60 | 0.85 | .84 | 3.54 | 1.00 | 3.63 | 0.77 | -0.50 | 55.38 | -.11 | .62 |
| 自己欺瞞 | 3.63 | 0.97 | .77 | 3.50 | 1.06 | 3.69 | 0.92 | -0.90 | 60.82 | -.19 | .37 |
| 印象操作 | 3.60 | 0.87 | .68 | 3.62 | 1.06 | 3.60 | 0.78 | 0.12 | 53.33 | .03 | .91 |

1 サンプルの t 検定

次に、一般大学生の犯罪行為と迷惑行為の潜在的・顕在的な非許容的態度の特徴を検討するために、中立的な態度を示す値を基準値とした1サンプルの t 検定をそれぞれ実施した。紙筆版ST-IATについては0を、SD法による質問票については理論的中央値である4を基準値

とした。その結果、本研究の協力者は犯罪行為（潜在的態度： $t(112) = 2.44, p = .016$ 、顕在的態度： $t(112) = 85.77, p < .001$ ）と迷惑行為（潜在的態度： $t(112) = 3.90, p < .001$ 、顕在的態度： $t(112) = 32.65, p < .001$ ）に対して、潜在的にも顕在的にも非許容的であることが示された。

相関分析

次に、各尺度に対してSpearmanの相関分析を実施した。犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度では、潜在面同士（ $\rho = .33, p < .001$ ）と顕在面同士（ $\rho = .38, p < .001$ ）では有意な正の相関が確認された。他方、犯罪行為への非許容態度の潜在面と顕在面は正の相関（ $\rho = .21, p = .023$ ）が、迷惑行為への非許容態度の潜在面と顕在面は無相関（ $\rho = .09, p = .327$ ）がそれぞれ確認された。また、迷惑行為への潜在的な非許容的態度と犯罪行為への顕在的な非許容的態度は有意傾向の正の相関（ $\rho = .16, p = .089$ ）が、犯罪行為への潜在的な非許容的態度と迷惑行為への顕在的な非許容的態度は無相関（ $\rho = .14, p = .137$ ）がそれぞれ確認された。他方、犯罪行為と迷惑行為への許容的態度は、潜在面・顕在面ともに社会的望ましさの自己欺瞞（潜在面： $\rho = .01 \sim .03$ 、顕在面： $\rho = -.00 \sim -.13$ ）や印象操作（潜在面： $\rho = -.08 \sim -.14$ 、顕在面： $\rho = -.04 \sim -.13$ ）と無相関であった。また、社会的望ましさの自己欺瞞と印象操作の間では、高い正の内部相関が確認された（ $\rho = .72, p < .001$ ）。以上の結果をTable 5に示した。

Table 5
各尺度間の相関分析の結果

| | | 潜在的な非許容的態度 | | 顕在的な非許容的態度 | | 社会的望ましさ | |
|----------------|------|------------|-------|------------|------|---------|------|
| | | 犯罪行為 | 迷惑行為 | 犯罪行為 | 迷惑行為 | 自己欺瞞 | 印象操作 |
| 潜在的な 非許容的態度 | 犯罪行為 | — | | | | | |
| | 迷惑行為 | .33 *** | — | | | | |
| 顕在的な 非許容的態度 | 犯罪行為 | .21 * | .16 † | — | | | |
| | 迷惑行為 | .14 | .09 | .38 *** | — | | |
| 社会的 望ましさ | 自己欺瞞 | .01 | .03 | .00 | -.13 | — | |
| | 印象操作 | -.08 | -.14 | -.04 | -.13 | .72 *** | — |

*** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$

さらに社会的望ましさの印象操作と自己欺瞞を統制変数として投入した偏相関分析を実施したものの、社会的望ましさを統制する前とほとんど結果は変わらなかった。犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度において、潜在面同士（ $\rho = .31, p = .001$ ）および顕在面同士（ $\rho = .38, p < .001$ ）で有意な正の相関が確認された。また、犯罪行為への潜在的な非許容的態度と顕在的な非許容的態度は有意な正の相関（ $\rho = .21, p = .028$ ）が、迷惑行為への潜在的な非許容的態度と顕在的な非許容的態度は無相関（ $\rho = .09, p = .360$ ）がそれぞれ確認された。また、犯罪行為への潜在的な非許容的態度と迷惑行為への顕在的な非許容的態度（ $\rho = .15, p = .108$ ）と、迷惑行為への潜在的な非許容的態度と犯罪行為の顕在的な非許容的態度（ $\rho = .14, p = .147$ ）はいずれも無相関であった。

考察

本調査の目的は、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度の潜在的側面を紙筆版ST-IATで、顕在的側面をSD法による質問票でそれぞれ測定し、犯罪行為・迷惑行為による非許容的態度の潜在面と顕在面の関連を検討することにより、犯罪行為・迷惑行為ST-IATの必要性を検討することであった。分析の結果、犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度においては、一定の関連性が見出された。また、迷惑行為への非許容的態度については、顕在面と潜在面で異なる特徴を有する可能性があることが示された。

基礎統計量と性差

紙筆版ST-IATによって測定した犯罪行為への潜在的な非許容的程度と迷惑行為への潜在的な非許容的程度は t 検定の結果より同程度であることがわかった。しかし、標準偏差については、犯罪行為への潜在的な非許容的態度のほうが迷惑行為の犯罪行為への潜在的な非許容的程度よりも大きな値であった。これは、稲垣・澤田 (2022) のいじめIATの値 ($SD = 4.92$) や、小塩他 (2009) 自尊感情IATの値 ($SD = 6.23$) といったこれまで開発されてきた紙筆版IATの値と比較しても大きかった。津田 (2019) は、属性カテゴリーの刺激語の表現を能動態と受動態にした場合では、前者の方の SD がやや高くなることを報告している。また、一部の参加者にとっては、本研究で用いた犯罪行為の刺激語にややインパクトの高い表現が含まれていたために反応時間に大きなばらつきが生じた可能性がある。今後は、これらの要因を考慮し、さらなるデータを蓄積した上で、犯罪行為への潜在的な非許容的程度の SD が大きかった原因を究明する必要がある。

なお、本研究で試作した犯罪行為と迷惑行為の顕在的非許容的態度においては、天井効果が見られた。これは、健康な一般大学生を対象としたことから、犯罪行為や迷惑行為に対していずれも非許容的であったことが原因であろう。しかし、大学生の喫煙者の半数程度が路上喫煙などを許容するといった報告 (石垣, 2005) を考慮した場合、一般大学生であっても迷惑行為に許容的な人々の存在を示唆するような報告も存在する。したがって、こうした人々は顕在的に迷惑行為に非許容的かもしれないが、潜在的には許容的な可能性もあるため、こうしたサブタイプの存在を確認する必要がある。

1 サンプルの t 検定の結果

次に、本研究のデータが犯罪行為や迷惑行為に対する態度が非許容のかそうでないかを明らかにするために、紙筆版ST-IATにおいては中立の値を示す0を、SD法による質問票においては理論的中央値である4を検定変数とした1サンプルの t 検定を実施した。その結果、本研究では、犯罪行為と迷惑行為の潜在面・顕在面がすべて非許容的であることが示された。これは、本研究のサンプルが一般大学生を対象としていたためであることから、一般的に犯罪行為や迷惑行為への非許容的態度は顕在面でも潜在面でも非許容的であると考えられる。なお、本研究で行った1サンプルの t 検定では、全協力者を投入した分析であり、上述の石垣 (2005) の報告などから考えられる迷惑行為を潜在的に許容するサブタイプの存在を否定する

ものではない。

相関分析

次に、各変数同士の関連性を検討するためにSpearmanの相関分析を行った結果、迷惑行為の非許容的態度においては、潜在面と顕在面でやや異なる特徴を有することがわかった。

まず、社会的望ましさは、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度の顕在面・潜在面の全てと無相関であった。こうした結果については、社会的望ましさが自尊感情の顕在面と関連するにも関わらず、自尊感情の潜在面を無相関である結果（藤井・上淵, 2010）と異なる結果であった。さらに、犯罪行為への非許容的態度は顕在面と潜在面は有意な正の相関関係にあったが、迷惑行為への非許容的態度は顕在面と潜在面は無相関であった。これは、犯罪行為の非許容的態度に関しては顕在面と潜在面がある程度共通した特徴を有するのに対して、迷惑行為への非許容的態度に関しては顕在面と潜在面で異なる特徴を有するとそれぞれ考えられる。そのため、紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATにより測定された犯罪行為と迷惑行為への非許容的態度の潜在的側面の特徴を明らかにする必要がある。

総合考察

本研究では、犯罪行為・迷惑行為に対する非許容的態度を測定する紙筆版ST-IATとSD法による質問票がそれぞれ試作された。犯罪行為や迷惑行為をすることがほとんどないと目される一般大学生を対象としたためか、犯罪行為と迷惑行為への態度は、顕在面も潜在面も非許容的であることが示された。また、これまで開発されてきたIAT（e.g., 藤井, 2011; 藤井・上淵, 2010）と同じく、紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATは社会的望ましさの影響をほとんど受けないことが示された。ただし、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度の顕在面が社会的望ましさとの関連がなかったことから、犯罪行為・迷惑行為への非許容的態度の潜在面を測定する意義について十分に示すことができなかった。したがって、犯罪傾向や非行傾向の高い人々などサンプルの属性を考慮しつつ、犯罪行為への非許容的態度の潜在面と顕在面の異同を十分に検討していく必要がある。他方、迷惑行為への非許容的態度については、潜在面と顕在面で関連性が見いだせなかった。これは、迷惑行為への非許容的態度において、潜在面と顕在面がそれぞれ異なる側面を有する可能性を示している。しかし、迷惑行為への非許容的態度の潜在面と顕在面それぞれの特徴については本研究で用いた測度では検討できない。また、これまでに迷惑行為の生起および抑制メカニズムにおいて検討されている（e.g., 原田他, 2009; 油尾・吉田, 2012）ものの未だ不明瞭な点も少なくない。そのため、多様な属性を有する人々を対象に、迷惑行為の生起頻度などを踏まえながら様々な概念との関連を検討することにより迷惑行為への非許容的態度の潜在的側面の妥当性について検討していく必要がある。以上から、紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATについての今後の展望を考察する。

まず、今後は紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATの信頼性と妥当性の検証が必要である。犯罪行為や迷惑行為の潜在的な非許容的態度と、実際の犯罪行為や社会的迷惑行為の経験の有無や生起頻度の関連を検討することは急務であろう。また、本研究では紙筆版犯罪行為

ST-IATと紙筆版迷惑行為ST-IATの実施手順は同一でありカウンターバランスをとっていない。この瑕疵が本研究で得られたデータに何らかの影響を与えた可能性は否定できないため、同IATを同時実施する際には、これらのカウンターバランスを取り、本研究との結果の差異を検討する必要があるだろう。

また、これまでに、犯罪者の背景に小児期逆境経験が見られることが多いこと (e.g., Fox et al., 2015; Reavis et al., 2013) や、性犯罪者が受けた逆境経験に対して、眼球運動による脱感作と再処理法 (Eye Movement Desensitization and Reprocessing: EMDR) によりトラウマケアを実施すると、性犯罪に対する態度が良好な方向に変化すること (e.g., Ricci, & Clayton, 2016; Ricci et al., 2006) が示されている。こうした点を考慮すると、犯罪行為や迷惑行為が許容的になるメカニズムには、不適切な被養育経験などにより、犯罪行為や迷惑行為に暴露することが原因の一端である可能性がある。そのため、こうした人々の犯罪行為や迷惑行為への潜在的な非許容的態度をトラウマケアなどの心理療法により回復させることができるかもしれない。その結果として、再犯性の低下に寄与する可能性があるだろう。今後、紙筆版犯罪行為・迷惑行為ST-IATを矯正処遇の効果の検証として運用することにより、矯正処遇の精緻な検討が可能となるかもしれない。

なお、健常群などを対象に、これまでに犯罪行為や社会的迷惑行為に関連するとされてきた概念であるダークトライアド (Paulhus, & Williams, 2002) や共感性のアンバランスさ (河野他, 2013), 衝動性 (大江他, 2008), 公的自己意識力 (栗林, 2014), などと、犯罪行為や迷惑行為への潜在的な許容的態度の関連を検討することにより、犯罪行為や迷惑行為の予防に影響する要因も検討することが可能となるであろう。

附記

本研究は、実施にあたり、当時人間環境大学人間環境学部の4年生であった梅田真奈美さんと横山千聖さん、近藤優萌さんに多大な協力を得た。この場を借りて感謝申し上げる。

引用文献

- 相川 充・藤井 勉 (2011). 潜在連合テスト (IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82(1), 41-48. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.82.41>
- Banse, R., Seise, J., & Zerbes, N. (2001). Implicit attitudes towards homosexuality: Reliability, validity, and controllability of the IAT. *Zeitschrift für experimentelle Psychologie*, 48(2), 145-160. <https://doi.org/10.1026/0949-3946.48.2.145>
- 土居 淳子・川西 千弘 (2012). 拡散モデルに基づく潜在的連合テストデータの分析 京都光華女子大学研究紀要, 50, 111-122.
- Fox, B. H., Perez, N., Cass, E., Baglivo, M. T., & Epps, N. (2015). Trauma changes every-thing: Examining the relationship between adverse childhood experiences and serious, violent and chronic juvenile offenders. *Child abuse & neglect*, 46, 163-173. <https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2015.01.011>
- 藤井 勉 (2011). 不安 IAT の予測的妥当性の検討——他者評定との関連から—— パーソナリティ研究, 20(1), 57-60. <https://doi.org/10.2132/personality.20.57>

- 藤井 勉・上淵 寿 (2010). 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 61(1), 113-120.
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2015). 顕在的・潜在的シャイネスと心理的適応との関連——IAT を用いて—— 感情心理学研究, 22(3), 128-134. <https://doi.org/10.4092/jsre.22.128>
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480. <https://doi.org/10.1037//0022-3514.74.6.1464>
- 原田 知佳・吉澤 寛之・吉田 俊和 (2009). 自己制御が社会的迷惑行為および逸脱行為に及ぼす影響——気質レベルと能力レベルからの検討—— 実験社会心理学研究, 48(2), 122-136. <https://doi.org/10.2130/jjesp.48.122>
- 羽間 京子・勝田 聡 (2021). 保護観察におけるアセスメントツールの再犯予測力の検証. 千葉大学教育学部研究紀要, 69, 27-32.
- 稲垣 勉・澤田 匡人 (2022). 中学生のいじめに対する態度がいじめ関与行動に及ぼす影響——いじめ IAT 作成の試み—— 学習院女子大学紀要, 24, 71-90
- 石垣 尚男. (2005). 大学生の日常生活行動に対する許容意識 愛知工業大学研究報告, 40, 243-248.
- 木村 敦 (2020). 子ども・若者が変わるとき: 育ち・立ち直りを支え導く少年矯正の実践と課題 多摩心理臨床学研究, 14, 13-22.
- 河野 莊子・岡本 英生・近藤 淳哉 (2013). 青年犯罪者の共感性の特性 青年心理学研究, 25(1), 1-11. https://doi.org/10.20688/jsyap.25.1_1
- 熊谷 芳子・石田 賢哉・沖 律郎・船橋 忠勝・花田 隆浩・廣川 俊互・船木 昭夫 (2019). 青森刑務所での釈放前指導において実施される SST の評価と課題——テキストマイニングによる SST 参加者の感想内容の分析—— 日本ヒューマンケア学会誌, 12(2), 20-26. https://doi.org/10.50922/jjahcs.12.2_20
- 栗林 克匡 (2014). 公的自己意識が授業中の携帯電話における迷惑行動に及ぼす影響 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 51, 51-59.
- 間宮 瑠美 (2023). 犯罪の一般理論における「セルフコントロール」の意義 産大法学, 56(4), 433-453.
- 森 朱輝・落合 亮太・徳永 友里・今津 陽子・平井 美佳・渡部 節子 (2020). 紙筆版結核 IAT (Implicit Association Test: 潜在連合テスト) の作成および信頼性・妥当性の検討 日本看護学会誌, 40, 143-151. <https://doi.org/10.5630/jans.40.143>
- 中村 真 (2012). 「社会的迷惑行為」に関する研究の動向——社会的迷惑行為の内容および測定方法, 迷惑行為に影響する心理的要因に着目して—— 江戸川大学紀要, 22, 79-89.
- 中村 信次・野寺 綾 (2017). 色に対する潜在的態度 (3) ——紙筆版 IAT を用いた潜在的色嗜好の集団計測の可能性検討—— 日本色彩学会誌, 41(2), 45-54. https://doi.org/10.15048/jcsaj.41.2_45
- 中谷 智美・福井 義一・大浦 真一・今井田 貴裕 (2021). 催眠状態期待の修正を意図した心理教育による意識的・非意識的催眠態度の変化——大学生を対象とした予備的研究—— 甲南大学紀要. 文学編, 172, 151-171.
- 岡本 英生・老田 彩央里・河野 莊子 (2023). 大学生の社会的迷惑行為と対象者別での共感性との関係について 犯罪心理学研究, 61(1), 15-24. https://doi.org/10.20754/jjcp.61.1_15
- 大江 由香・森田 展彰・中谷 陽二 (2008). 性犯罪少年の類型を作成する試み——再非行のリスクアセスメントと処遇への適用—— 犯罪心理学研究, 46(2), 1-13. https://doi.org/10.20754/jjcp.46.2_1
- 大浦 真一・松尾 和弥・福井 義一 (2018). 紙筆版催眠シングル・ターゲット潜在連合テストの開発: 催眠への意識的・非意識的態度と催眠に対するイメージの関連 臨床催眠学, 19, 40-50.
- 小塩 真司・西野 拓朗・速水 敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連. パーソナリティ研究, 17(3), 250-260. <https://doi.org/10.2132/personality.17.250>
- Paulhus, D. L. (1991). Measurement and control of response bias. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes*. New York: Academic Press. 17-59. <http://dx.doi.org/10.1016/B978-0-12-590241-0.50006-X>
- Paulhus, D. L., & Williams, K. M. (2002). The Dark Triad of personality: Narcissism, Machiavellianism and psychopathy. *Journal of Research in Personality*, 36, 556-563. [https://doi.org/10.1016/S0092-6566\(02\)00505-6](https://doi.org/10.1016/S0092-6566(02)00505-6)

- Reavis, J. A., Looman, J., Franco, K. A., & Rojas, B. (2013). Adverse childhood experiences and adult criminality: how long must we live before we possess our own lives? *The Permanente Journal*, *17*(2), 44-48. <https://doi.org/10.7812%2FTPP%2F12-072>
- Ricci, R. J., & Clayton, C. A. (2016). EMDR with sex offenders: Using offense drivers to guide conceptualization and treatment. *Journal of EMDR Practice and Research*, *10*(2), 104-118. <http://dx.doi.org/10.1891/1933-3196.10.2.104>
- Ricci, R. J., Clayton, C. A., & Shapiro, F. (2006). Some effects of EMDR on previously abused child molesters: Theoretical reviews and preliminary findings. *The Journal of Forensic Psychiatry & Psychology*, *17*(4), 538-562. <https://doi.org/10.1080/14789940601070431>
- 斎藤 和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集文学部篇, 24, 67-77.
- Sea, J., Beauregard, E., & Lee, S. (2020). Crime scene behaviors and characteristics of offenders with mental illness: A latent class analysis. *Journal of forensic sciences*, *65*(3), 897-905. <https://doi.org/10.1111/1556-4029.14276>
- 潮村 公弘 (2015). 潜在連合テスト (IAT) の実施手続きとガイドライン——紙筆版 IAT を用いた実習プログラム・マニュアル—— 対人社会心理学研究, *15*, 31-38. <https://doi.org/10.18910/54428>
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, *17*(1), 18-28. <https://doi.org/10.2132/personality.17.18>
- 津田 恭充・高沢 佳司・島井 哲志 (2019). 潜在連合テストにおいて能動態と受動態は区別されるか?. パーソナリティ研究, *28*(2), 164-166. <https://doi.org/10.2132/personality.28.24>
- 山本 彩・鈴木 育美 (2019). 女子刑務所において自閉スペクトラム症の特性を加味した支援を行った 2 事例の報告 児童青年精神医学とその近接領域, *60*(1), 109-123. https://doi.org/10.20615/jscap.60.1_109
- 吉田 俊和・斎藤 和志・北折 充隆 (2009). 社会的迷惑の心理学 ナカニシヤ出版.
- 油尾 聡子・吉田 俊和 (2012). 送り手との互惠性規範の形成による社会的迷惑行為の抑制効果——情報源の明確な感謝メッセージに着目して—— 社会心理学研究, *28*(1), 32-40. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00008195841>
- 油尾 聡子・吉田 俊和 (2013). 社会的迷惑行為の抑止策としての好意の提供 実験社会心理学研究, *53*(1), 1-11. <https://doi.org/10.2130/jjesp.1109>

今井田 貴裕 人間環境大学心理学部 講師 (臨床心理学)
大浦 真一 東海学院大学人間関係学部 准教授 (臨床心理学)

